

安心して子育てできる環境づくりについて
政策提言書

秦野市議会 文教福祉常任委員会

令和7年5月28日

目 次

1. はじめに	…… 1
2. 協議の経過	…… 3
3. 本市における現状と課題	…… 5
4. 調査検討の経過	…… 12
5. 政策提言	
提言 1	…… 21
提言 2	…… 23
6. おわりに	…… 25

Ⅰ はじめに

本市は、総合計画はだの 2030 プランにおいて、都市像を「水とみどりに育まれ 誰もが輝く 暮らしよい都市（まち）」とし、この都市像を実現するための基本目標 5 つのうちの 1 つに、「誰もが健康で共に支えあうまちづくり」を掲げている。

また、本格的な人口減少、少子・超高齢社会に対応し、持続可能なまちづくりへの転換を図るため、本市で現在優先的に取り組んでいる「未来へつなぐ 5 つの重点事業（リーディングプロジェクト）」は、秦野市まち・ひと・しごと創生総合戦略の基本目標とし、国の総合戦略や社会環境の変化、秦野らしさを踏まえて、5 つのプロジェクトで構成している。

この 5 つのリーディングプロジェクトの 1 つが、「未来を拓く子育て・教育プロジェクト」で、結婚・妊娠・出産・育児への切れ目ない支援を行い、安心して子育てできる環境を整備するとともに、教育水準の改善・向上や、中学校給食の完全実施を中心とした取組により、本市の未来を担う子どもたちの生きる力を育む教育環境づくりに取り組んでいる。

さらに、都市像を実現するための基本目標 5 つのうちの 1 つである「誰もが健康で共に支えあうまちづくり」を実現するための基本政策の 1 つに、「若い世代の結婚と出産・子育ての希望をかなえる社会環境づくりの推進」を掲げ、施策として「結婚・妊娠・出産・育児までの切れ目ない支援の充実」、「安心して子育てできる環境づくりの推進」、「支援を必要とする子ども・家庭への対応」に取り組むとしている。

本市は、基本政策だけでなく、リーディングプロジェクトにおいても子育て支援の充実が重要であるとしており、本常任委員会も同様に、子育て支援の充実は重要であると考えた。

また、人口減少下における少子化対策は切り離せないものであり、子どもとその親を主役に、市民と行政と地域と教育・子育て機関が、連携・協働していくことが望ましいと考える。

文教福祉常任委員会では、本市で子育てをしていくためには、今何が必要で、何をすべきかを検討し、「安心して子育てできる環境づくり」

をテーマとして、政策提言の協議を重ねた。

今回の提言が、子育て世代が「秦野市で子育てしてよかった」と思えるまちとなり、若い世代も「秦野市に住み続けたい」と思っただけ
ることの一助となることを願い、提言する。

2 協議の経過

文教福祉常任委員会では、政策提言に向けて、下記のとおり調査・研究活動に取り組んできた。

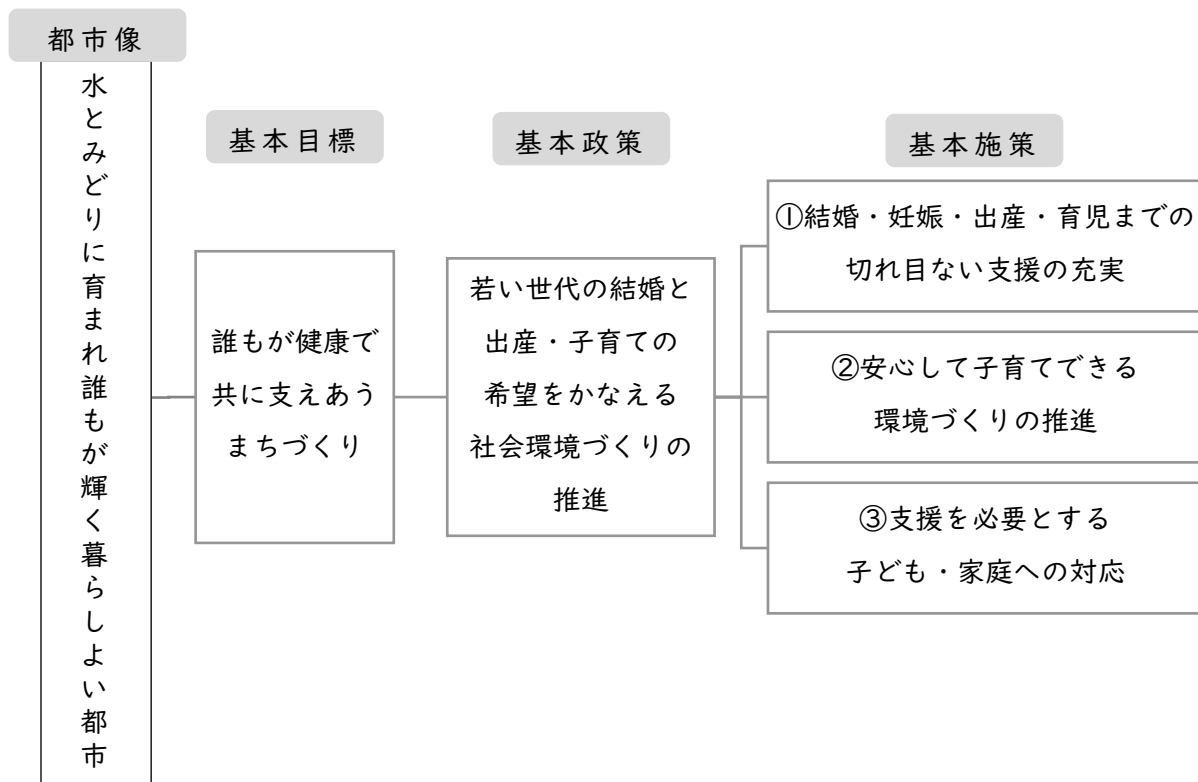
日程		協議事項
令和6年	1月16日	テーマの選定
	2月16日	テーマの決定
	4月16日	テーマに基づく所管事務調査先の報告
	5月13日 ～15日	所管事務調査 (兵庫県加東市、兵庫県加古川市、静岡県島田市)
	5月16日	所管事務調査の振り返り 提言内容の選定
	6月13日	提言内容の確認
	7月16日	テーマに関する調査・研究 (本市の現状と課題の把握、抽出)
	7月26日	テーマに関する調査・研究 (ぽけっと21保健福祉センターを現地調査)
	8月19日	テーマに関する調査・研究 (本市の現状を踏まえ、具体的な提言内容を協議) 意見交換先の団体選定
	8月27日	テーマに関する調査・研究 (はだのこども館を現地調査)
	9月19日	意見交換先の団体決定
	10月16日	テーマに関する調査・研究 (本市の現状と課題の整理、提言の方向性を確認)

日程		協議事項
令和6年	11月15日	テーマに関する調査・研究 (骨子案について確認) 議会報告会・意見交換会について協議
	12月1日	意見交換会
令和7年	1月16日	提言書(案)の概要確認、提言事項の協議
	2月12日	講師による提言内容の講評
	2月14日	提言書(案)の提示及び協議
	3月10日	提言書(案)を委員会内で決定
	4月16日	概要版の作成、協議及び決定
	5月16日	議会全員協議会にて提言書を確定

3 本市における現状と課題

文教福祉常任委員会では、本テーマとの関連性が高いと考えられる本市の総合計画はだの 2030 プランを軸に協議を行い、3つの基本施策について、各施策の目指すまちの姿との相違はないか、現状と課題を分析した。

【秦野市総合計画はだの 2030 プラン】（一部抜粋）



【各基本施策の目指すまちの姿】

基本施策①

安心して妊娠・出産ができ、
子育て世代が「秦野で子育てしてよかった」と思えるまち

基本施策②

安心して子どもを産み育てることができるまち、子育てに喜びを感じることをできるまち、地域社会で子育てを支えていくまち

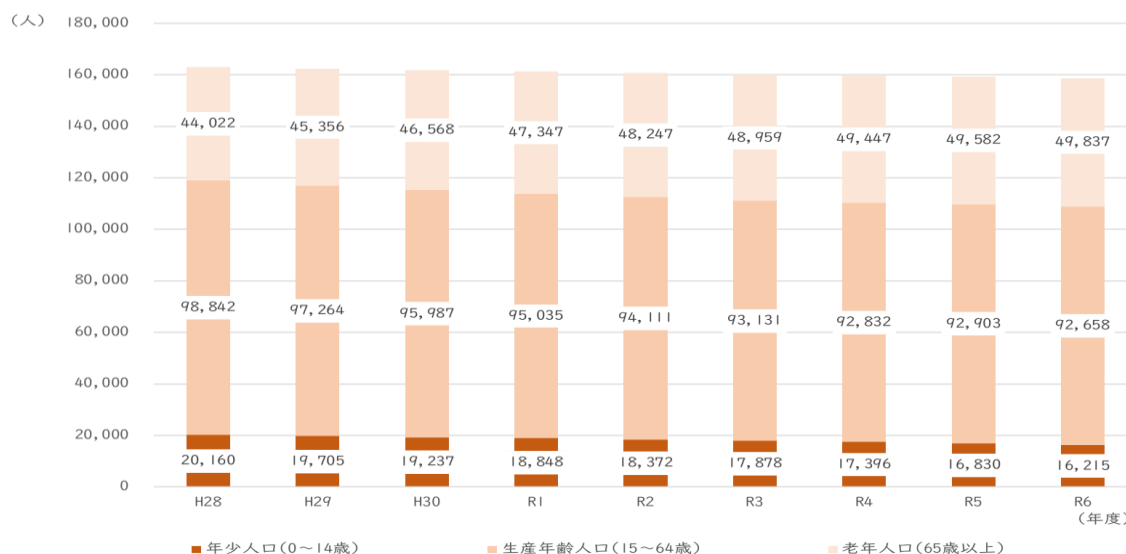
基本施策③

生まれ育った環境によって左右されることなく、
全ての子どもが将来に夢や希望を持てるまち

人口等の推移

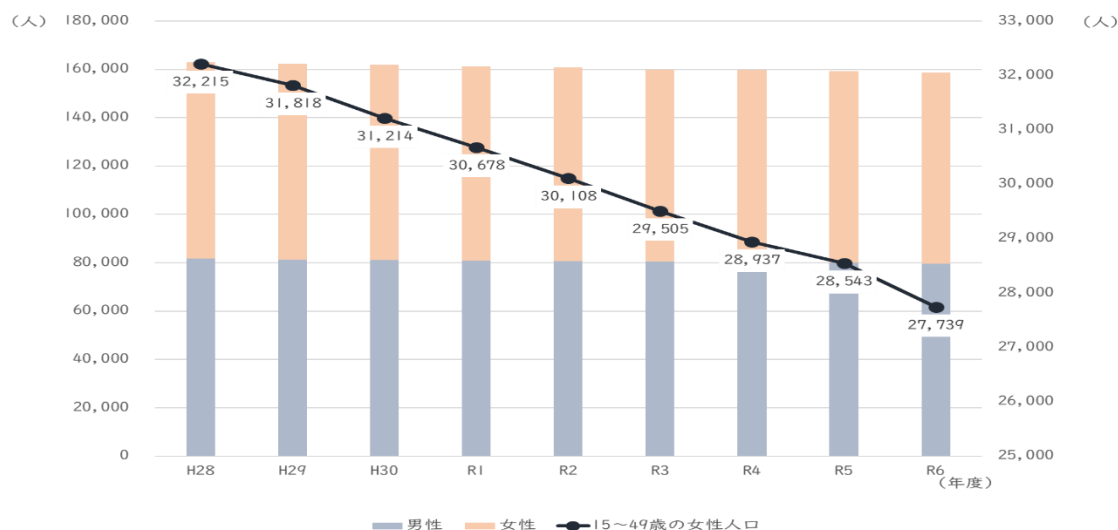
(1) 本市の人口

本市の人口は、平成28年（2016年）以降、老年人口（65歳以上）は増加する一方、年少人口（0歳～14歳）及び生産年齢人口（15歳～64歳）は減少を続けており、今後の将来推計人口については、総人口及び年少人口ともに減少傾向と予想されている。



(2) 女性人口の推移

人口総数に対する女性の人口数はほとんど変わらないが、15～49歳の女性人口は減少の一途をたどっている。なお、婚姻については、50歳時の未婚率（生涯未婚率）が男女ともに増加傾向にあり、女性（20～39歳）の有配偶者率が減少傾向にある。



(3) 子どもの出生数の推移

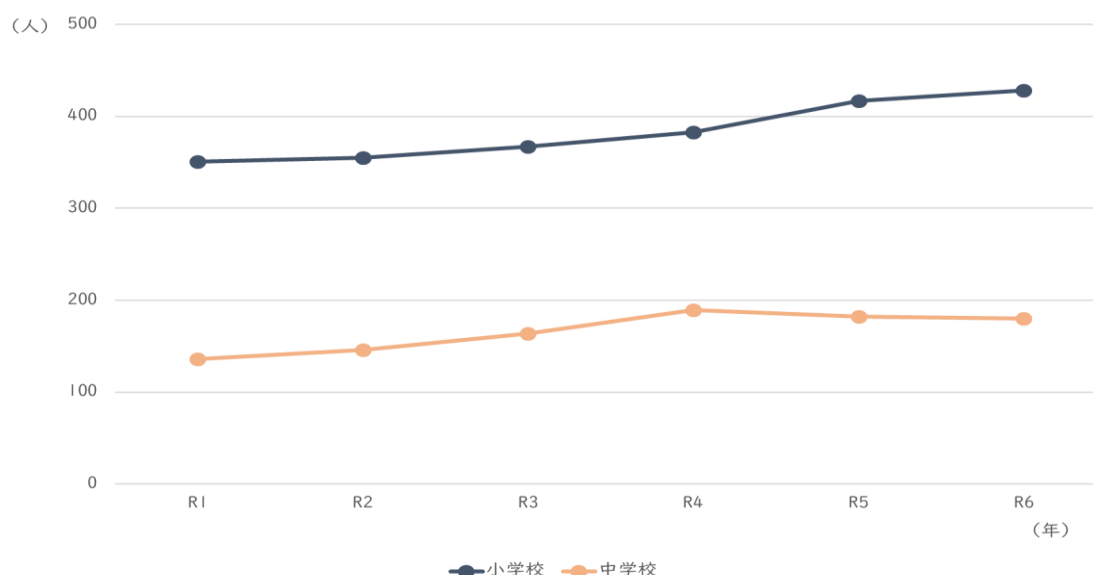
平成 28 年（2016 年）と令和 3 年（2021 年）を比較すると 245 人減少しており、合計特殊出生率¹については、平成 28 年以降、全国及び神奈川県 averages を下回り、相模原市を除く県央八市と比較しても低い水準となっている。（令和 3 年の本市の合計特殊出生率は 1.07（全国平均 1.30、神奈川県平均 1.19））



¹ 合計特殊出生率とは、人口に対して生まれた子どもの数を表す指標の一つであり、その年における 15～49 歳の女性の年齢別出生率を合計したもの。1 人の女性が仮にその年の年次別出生率で一生涯の間に子どもを産むとしたときの子どもの数に相当し、人口動態の出生の傾向を見るときに主要な指標。

(4) 障がい児・者の推移

世間の障害に対する理解が進んだことや個人に応じた適切な支援を提供する特別支援教育の重要性が高まったこと等により、本市の特別支援学級に在籍する児童・生徒数は、増加傾向である。



子育て支援・地域交流の現状

(1) 子育て支援

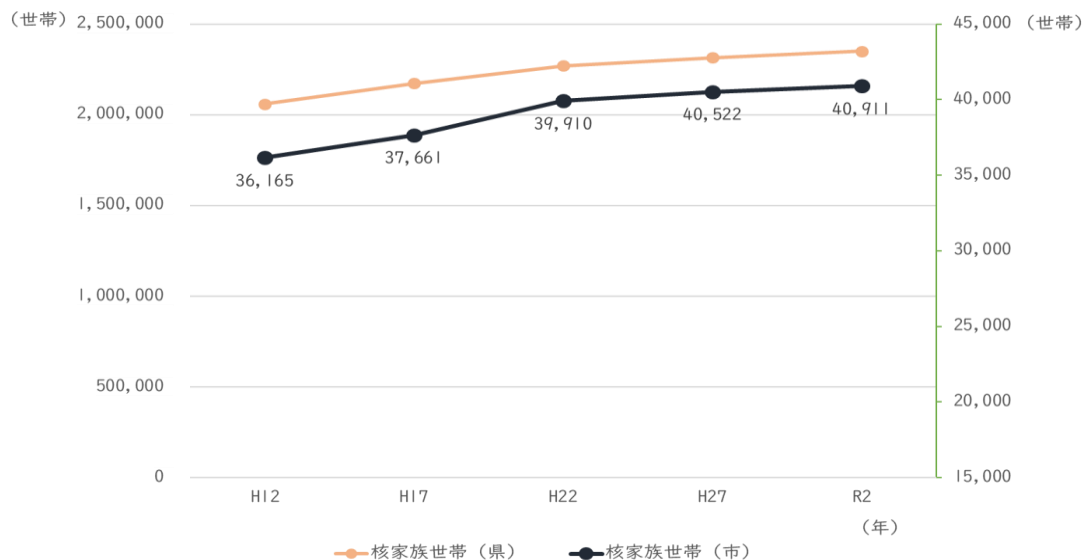
本市には、子育て中の方が情報交換や交流を深められる場として、子育て支援センター「ぽけっと21」を市内9か所で開設し、子育てアドバイザーが常駐しているが、開室日は各センターで異なり、常時開室しているセンターは1つもない。また、駐車場が少ない場所も多く、子育て中の方は子どもを連れての移動に苦労している。

また、急な用事や冠婚葬祭などの私的な理由のほか、リフレッシュの目的により一時的に家庭で保育できなくなった場合、各保育施設で一時預かりを行う事業を実施しているが、初回利用時には事前登録が必要など、手続き面や費用面の負担から、サービスを利用せずに、仕事を休んで対応する保護者も一定数いる。

(2) 地域社会の交流

本市も、全国と同様、核家族世帯が増加し、これにより、従来自然な形で行われていた高齢者と子ども・若者間の世代間交流が難しくなっていると考えられる。また、自治会の加入率も60%前後を推移しているため、地域との交流が希薄となり、地域で子育てする、または子育てしている人を地域で支えるということが難しくなっていることも考えられる。

一方で、女性の社会進出等が進み、共働き世帯が増加していることで、夫婦だけで子育てするのではなく、周囲に頼りながら子育てしている人も多くなることが分かる。しかし、緊急時等に頼ることや相談する先も祖父母等の親族や友人・知人であり、ぽけっと21などの子育て支援施設等の行政機関に相談することは少ない現状がある。

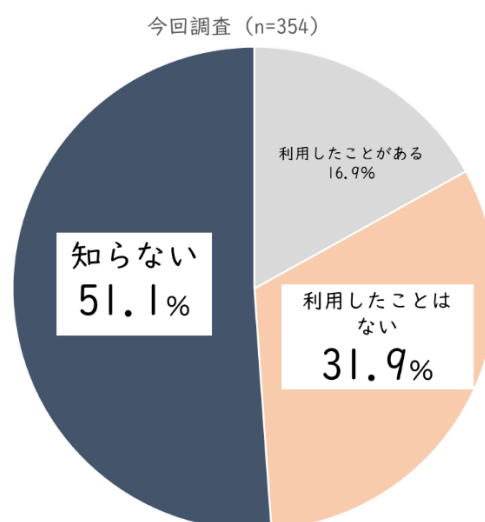


(3) 各地域の拠点

前述した子育て支援センター（ぽけっと 21）のほかに、本市には、こども館のほか、各地域に公民館や児童館があるが、児童館は少子化に伴う児童数の減少や施設の老朽化等により、半日館へと順次移行をしている。また、公民館は、児童館の機能移転が行われている場所もあるが、利用可能時間帯で利用率を算出すると、約 30% の利用となり、空いている時間が多いことが読み取れる。

さらに、こども館は、存在自体を知らないという市民も多く、本町地区周辺の児童・生徒の認知に留まっているのではないかと推測される。

	使用率（日数）	使用率（コマ数）
上公民館	36.3%	11.7%
渋沢公民館	61.2%	18.5%
本町公民館	83.6%	37.3%
南が丘公民館	71.1%	25.6%
堀川公民館	82.6%	35.6%
西公民館	91.4%	36.7%
南公民館	75.5%	30.9%
北公民館	71.1%	26.8%
大根公民館	74.8%	32.0%
東公民館	67.0%	23.7%
鶴巻公民館	67.2%	24.1%



(4) 子どもの遊び場

市がこれまで行ってきた様々なアンケートから、子どもの遊び場に対して、「雨天時に子どもが遊べる場がなく、平塚市や海老名市などの市外の子育て施設に遊びに出かける必要がある」という声や、「街中の公園はボール遊びや自転車が禁止で、子どもの遊び場が少ない」という声が多く、交流活動に対しては、「ぽけっと 21（子育て支援センター）は、乳児期の子が多く、大きくなると行きにくい、同年齢の子どもと交流できる場が少ない」という声や、「世代間交流のできる場所や環境、地域で子育てする環境がない」という声が多かった。

(5) 子どもが将来に夢や希望を持てるための取組

本市では、子どもに交流と社会体験活動の場を提供する施設として、こども館があり、夏休みには、お仕事体験として、子どもたちが憧れの仕事を楽しみながら体験する事業も行っているが、前述したとおり、こども館の存在を知らない市民が多い。

【課題解決に向けてのビジョン】

大きな課題

- ✓ 常時開設している子育て支援拠点がない
- ✓ 子どもの遊び場・多世代での交流の場が少ない

解決に向けて

- ✓ 常時開設の子育て支援拠点を設ける
- ✓ 各地区に既にある施設を活用して子育て支援の拠点を設ける
- ✓ 全天候型の遊び場を確保し、多世代交流ができる拠点とする

「安心して妊娠・出産・子育てできる環境づくり」ができ、ひいては「地域のにぎわい活性化」にもつながるのではないかと

4 調査検討の経過

先進地への所管事務調査の実施

当常任委員会では、本テーマに関連する取組事例を調査するため、令和6年5月13日～15日に所管事務調査を実施した。

(1) 兵庫県加東市

ア 調査項目

加東市立東条学園小中学校（義務教育学校）について

イ 所感等

施設一体型の義務教育学校のため、異学年交流が数多く行われ、上級生と下級生のつながりが強く、上級生は下級生に指導し、下級生は上級生を手本としてお互いに成長しながら学校生活を送っている。また、職員室も1つのスペースにまとめることで、職員同士の交流・協力体制が築けるようになっている。

なお、通学は、低・中学年がスクールバスで通学し、高学年は自転車通学を原則としているため、低・中学年は安全に通学できようになっている。

さらに、東条学園小中学校には、地域住民が利用できる部屋（地域交流室）が設けられており、地域との交流にも重きを置いた学校となっていた。



(2) 兵庫県加古川市

ア 調査項目

見守りサービスについて

イ 所感等

高齢者の見守りサービスとして、地域事業者と連携協定を締結し、協力事業者が日常業務の範囲において見守り活動を行い、店舗等への来店時や対象者宅への道中において異変を察知した場合に市へ情報提供する関係づくりができていた。

また、「認知症高齢者等見守りサービス（見守りタグ）」は、発信機となる見守りタグを持ち歩くと、街中に設置されている約1,400台の見守りカメラ付近を通過した際に、通過履歴を知らせてくれるため、認知症により行方不明のおそれがある高齢者や、子どもの安全を確保するほか、家族等の身体的・精神的負担の軽減を図ることを目的としていた。

市内に約1,400台の見守りカメラがあることで、市内の犯罪件数は令和元年（2019年）には、平成29年（2017年）と比較し、約3割減少したとのことで、防犯面には一定の効果があると考ええる。

さらに、老人クラブ連合会が一人暮らし高齢者等への訪問活動を実施する「どないや訪問」も地域で支えあうという視点で子ども向けにも同様の関係が地域で築けたらいいと感じた。



(3) 静岡県島田市

ア 調査項目

島田市こども館について

イ 所感等

当該施設は、2階と3階に図書館、4階にこども館、5階から10階はマンションと様々な機能を持つ建物となっている。

こども館には、プレイルーム「ぼるね」のほか、活動室、一時託児室、ファミリー・サポート・センター事務局があり、有料の駐車場を図書館の利用者と共同で利用するほか、駅前のため近隣にも有料駐車場がある。

プレイルーム「ぼるね」は、遊びを通じて運動する機会を設けることを念頭に、遊具を選定した屋内での遊び場のため、雨天時にも利用でき、エリアも「動」と「静」に分け、乳幼児親子から小学生まで各年代に応じた遊び方ができるようになっている。

また、雨天時の混雑や市外の利用者もいるため、入館状況や待機状況をホームページで公開するようにしている。

さらに、大学生のボランティアを募集することや、年1回の休館日には特別支援学校専用の遊び場とするなど、学校との連携も行っている。



市内施設の現地調査の実施

所管事務調査の実施のほか、現在の子育て環境の状況を把握するために、市内の各施設に伺い、担当職員の説明を伺うほか、利用者からの声を伺った。

(1) ぽけっと 21 保健福祉センター

【日時】令和 6 年 7 月 26 日（金）

午前 9 時 30 分から

【所感等】

- ・常設の会場ではないため、開設日に合わせて、会場の準備から片付けを職員で行っている
- ・授乳スペースがなく、ベッドを壁の代わりとしてスペースを設けているので、安心して授乳できるスペースが必要



(2) はだのこども館

【日時】令和 6 年 8 月 27 日（火）

午前 10 時から

【所感等】

- ・全館フリー Wi-Fi があると自主学習する学生は勉強しやすいのではないか
- ・飲食できるスペースがロビーしかない
- ・学習室では赤本の貸出等を行っているが、図書館機能があるとより人が集まるのではないか



意見交換会と小・中学生へのアンケートの実施

Ⅰ 意見交換会

秦野市議会では、「議会報告会・意見交換会」を行い、令和6年度は、常任委員会別に行い、出された意見や要望を政策提言につなげることを目的に開催した。

文教福祉常任委員会では、「安心して子育てできる環境づくりに向けて」をテーマに、「子どもから高齢者までの多くの世代が交流できる場を整備するためにはどうすればよいか」を話し合うため、関係団体の皆様に参加いただき、グループワーク形式による意見交換を行った。開催状況は以下のとおりである。

【日 時】 令和6年12月1日（日）

秦野こども未来づくり会議終了後から

【テーマ】 多世代交流の拠点づくりについて

既存施設を活用した拠点づくりについて

【参加者】 学校運営協議会委員



(1) 各班で出た意見

ア 1 班

現状	✓ ぽけっと21は、開館時間が遅い・駐車場が不足（本市は車で移動する人が多い） ✓ コロナ禍以降、中学生のジュニアリーダー育成が停滞（ボランティア活動等も少ない） ✓ 南地区では公民館を主体とした子ども会を立ち上げ ✓ 公民館や児童館の活用促進が必要 ✓ 学校帰りに立ち寄る子どもたちの居場所が不足
提案	✓ ぽけっと21の開館時間を9時に、保健福祉センターを常設の会場として、駐車場問題は解決？ ✓ 地域資源を生かした場所づくり・取組（休耕地を利用した農業体験等） ✓ キッザニアのような職業体験ができる場（高校生・大学生にサポート依頼してもいいのでは） ✓ 多世代が学べる場（参考：札幌市図書館） ✓ 障害の有無にかかわらず、誰もが集える場
その他	✓ 学校の責任や制度に関する問題も考慮する必要があるのでは ✓ 子どもの教育には全世代が責任を持つべき ✓ 教育の課題はさまざま

イ 2 班

現状	✓ 公民館は子どもだけの利用ができない（子どもだけでの予約不可） ✓ 児童館は18歳以上が利用できない ✓ 各施設が利用しにくい ✓ 雨の日の遊び場がない ✓ 中高生の遊び場がない ✓ 周辺地域に子どもの遊び場や学習場所が不足
提案	✓ ボルダリング体験スペースの導入 ✓ 新拠点に図書館と子どもの遊び場（雨天時対応） ✓ 本市の地形を生かした遊び場 ✓ 屋上を活用した外で遊べるスペース ✓ 丹沢が見える景観を大切に ✓ 子どもたちだけで利用できるように
その他	✓ 機能だけでなく、利用しやすさや利用形態の見直しをすることが大切

2 小・中学生へのアンケートの実施

【実施日】令和6年12月1日（日）

【テーマ】多世代が交流できる拠点について

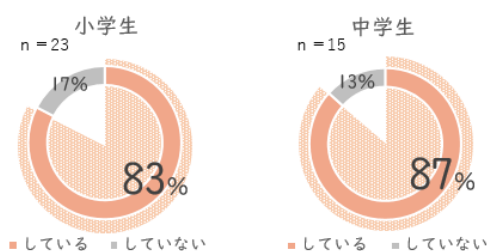
～児童・生徒が行きたくなる場所とするためには、どのような機能が必要か～

【対象】秦野未来づくり会議に参加した小学生及び中学生
（各学校代表者2名）

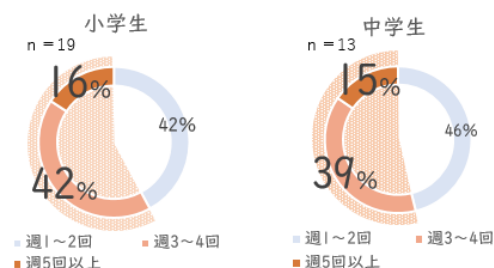
【実施概要】会議終了後にアンケート用紙を配付し、その場で回答をもらった。

【アンケート結果】

Q 習い事をしているか



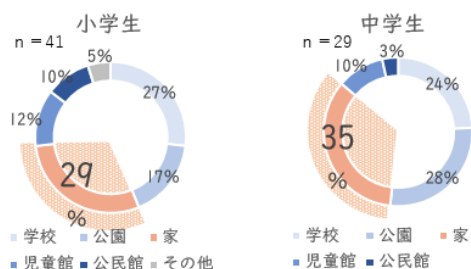
Q 習い事の頻度は



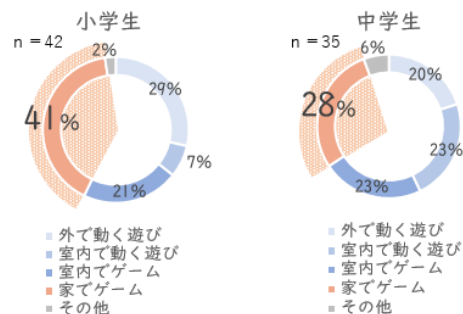
✓ 小学生では約80%の子が、中学生では約90%の子が、何かしらの習い事を実施している

✓ 習い事の頻度は、週3回以上で見ると、小学生が約60%、中学生が約55%

Q 普段遊んでいる場所は



Q 普段遊んでいる遊びは

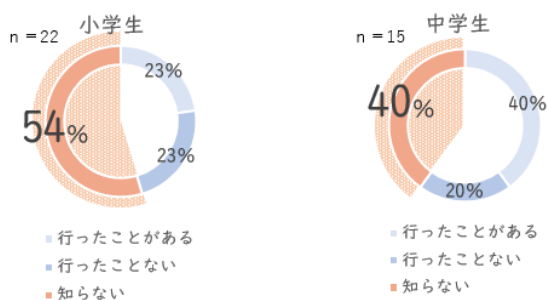


✓ 家で遊ぶ子が、小学生は約30%、中学生は約35%

✓ 家でゲームをして過ごす子が、小学生は約40%、中学生は約30%

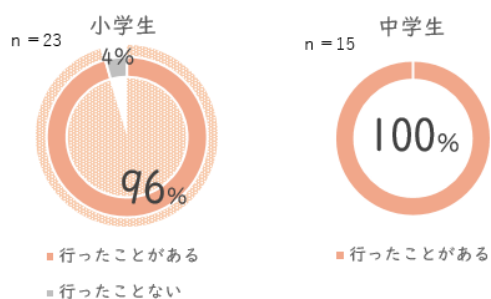
Q 各施設の認知度

はだのこども館

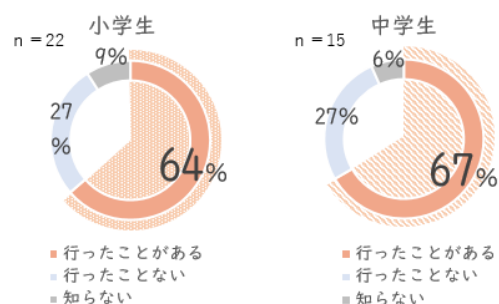


✓ こども館の認知度は、小学生の約55%、中学生の約40%が、施設を「知らない」と回答

公民館



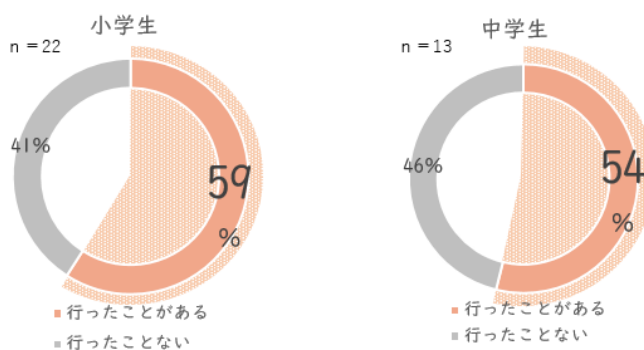
児童館



✓ 公民館の認知度は、小学生の約96%、中学生は100%が、施設に「行ったことがある」と回答

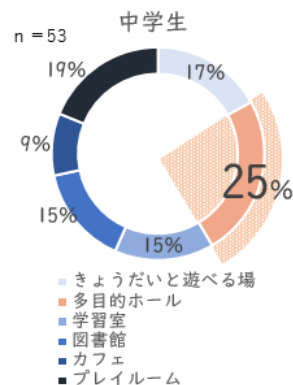
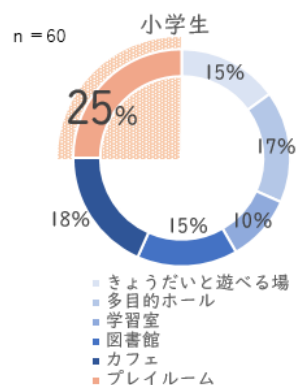
✓ 児童館の認知度は、小学生の約65%、中学生の約70%が、施設に「行ったことがある」と回答

Q 市外の子どもの遊び場に行ったことがあるか



✓ 市外の施設に行ったことがあるかという設問に対しては、小・中学生ともに約半数が「行ったことがある」と回答

Q 多世代交流に必要な場



✓ 小学生は「プレイルーム」という回答が約25%で一番多かったが、中学生は「多目的ホール」という回答が約25%で一番多かった

Q 新しい拠点にほしいもの (自由記載)



- ・雨でも体を動かすことのできる場所
- ・スポーツ（大縄など）ができる場所、大きな公園
- ・運動できるものが置いてある児童館のような場所
- ・アスレチックなど楽しく体を動かせる場所

- ・ボードゲーム等ができる場所
- ・スポーツ（大縄など）ができる場所、大きな公園
- ・遊んで話せる場所
- ・体験場



Q 既存施設にほしいもの (自由記載)



- ・空き家などを活用したフリースペース
- ・空いている教室や部屋を使った遊び場
- ・学校の多目的室を利用して多目的ホール
- ・空き家を活用して、1階は遊び場、2階はフリースペースなど

- ・子育て支援のほかに、ビンゴ大会などの開催
- ・公民館のホールで料理や工作ができる場所
- ・体育館を活用してさまざまな遊びを行う
- ・校庭などでゲートボールやゴルフ教室



5 政策提言

提言Ⅰ 新たな地域交流拠点の施設を設けて 子育て支援と多世代交流の充実を

市は、ランドマークとなる拠点を設けることを検討し、その拠点は、一つの目的だけの単独施設ではなく、図書館機能、子育て支援機能を設け、複合的な目的を持って使用ができるような拠点とすること。

【提言の背景と効果】

現在のはだのこども館は、老朽化により移転が検討されていること、また、その移転先として、秦野駅北口周辺が候補となっていることを把握した上で、ただ施設を造るのではなく、市民が訪れやすい場としていくことが何よりも重要である。

また、本市は、近年社会増が続いているが、生産年齢人口や年少人口は減少が続いている。子育てに対する支援を強化し、秦野市が子育てしやすいまちとなることが、本市のさらなる移住・定住につながると考える。

そのためには、一つの目的だけの単独施設として検討するのではなく、複合的な目的をもった施設としていくことが必要であり、子育て支援に関するワンストップ相談窓口や全天候型で遊べる場所を設けることで、子育て世帯が安心して過ごせる場となると考える。また、多くの世代が自然と滞在・交流できるよう図書館とカフェを併せ持った場とすることが必要である。

【具体的な取組案】

(1) 新拠点の建設時は若い世代との市民ワークショップ開催

より多くの市民が利用する拠点とする必要があるため、設計段階から若い世代（特に子育て世代）の声を取り入れるために、市民ワークショップを開催すること。

また、既存施設で来場者から挙がっているデメリットの解消を前提として協議を進めていくこと。

(2) こども館の機能拡充

子どもたちが将来に夢や希望を持つことができるよう、現在行っている職業体験で選べる業種を拡充し、楽しみながら社会体験ができる場となるよう検討すること。

(3) 多くの世代が滞在・交流することができる場所

自然と多世代が集まる場となる図書館とカフェを新拠点の中に設けるよう検討すること。

なお、図書館は書籍をテーマごとに陳列し、手に取りやすい仕掛けを施すほか、他の拠点で行っている子育て支援の情報発信機能も併せ持つことで、交流拠点の核となるようにすること。

(4) 妊娠・出産・育児に関するワンストップ相談窓口

こども家庭センターを子育ての総合相談窓口とし、各相談に対して適切な窓口や対応を案内できる場とするため、保健師と事務職の業務割り振りを整理し、人員確保をすること。

また、常設の一時預かり拠点を保健福祉センターまたは新拠点で設けること。

(5) 全天候型で子どもが遊べる場所

全天候型で年齢別に遊ぶスペースが区切られた遊び場を設けることで、多世代交流ができるよう検討すること。

なお、遊び場は本市の地形を生かした場とし、本市の目指す森林観光都市の視点から、秦野産材を活用した木育広場の設置と、本市の雄大な自然を感じられる屋外の遊び場も検討すること。

提言 2 既存施設を活用して子育て支援の強化と多世代交流を

市は、市内に点在する各既存施設が子育て支援と多世代交流の拠点となるよう機能の拡充を検討すること。その際は、担当部署だけでなく、市民の声を聴きながら、子育て関係課と連携し、誰もが利用できる環境となるよう努めること。

【提言の背景と効果】

市内の子育てに関する施設（学校や公民館、児童館等）は、老朽化等の問題により、今後、各施設が統廃合を検討する時期が来ていることを把握した上で、今ある施設を最大限に生かし、どのような施設、どのような機能が求められているかを見極める必要がある。

なお、施設の在り方を検討する際は、従来からの活用方法（固定概念）にとらわれることなく、庁内横断的に連携し、子どもたちと若い世代の意見を取り入れ、多様性の視点も踏まえて協議を進めていくことが必要と考える。

例えば、各地区にある既存施設が子育て支援の拠点となるために、気軽に相談できるよう子育て支援窓口を常設するとともに、多世代交流の場や地域で子どもを見守る拠点の場を増やすことを検討する必要がある。

一方、本市は地域によって、年齢構成や風土が異なるため、既存施設を活用していくことは、当該地域に適した子育て支援を提供することができると思う。また、既存施設の活用により、地域での交流が増え、地域で子育てをしていくという雰囲気醸成することも可能となると考える。

【具体的な取組案】

(1) 気軽に子育てについて相談できる窓口機能

ぽけっと 21 は、開設日が場所によって異なるため、いつでも相談・交流できるよう、子育て支援の拠点となっている保健福祉センターを常設拠点とすること。

なお、保健福祉センターのぽけっと 21 に授乳スペースを設けること。

(2) 余裕教室余裕時間帯の活用

学校の余裕教室、公民館等の余裕時間帯を活用して、料理教室や工作教室、ボードゲームなど、多世代が交流できるイベントの開催を検討すること。

(3) 各拠点で地域独自の取組を実施

休耕地を活用した農業体験など、地域の特色に合わせた体験を各既存施設で行うことで、多世代交流のほか、地域で子どもを見守る拠点ともなるため、より多くの場所で地域独自の取組が行えるよう支援をすること。

また、昔の縁側のように気軽に集まれる場を既存施設の活用だけでなく、民間企業とも連携して市内各所に設けること。

地域住民が率先して見守り活動や子どもの居場所づくりができるよう、雰囲気醸成を行うこと。

さらに、各既存施設で多世代交流を図るための協議を行う際には、若い世代（特に子育て世代）が、利用する時間帯、目的を調査し、交流を促すターゲットを子育て世代（学生も含む）と高齢者にしぼって取組を検討すること。

(4) こども健康部と各部局の連携

各既存施設へ学校帰りに立ち寄れない現状があるため、下校後に交流できる場となるよう教育委員会と調整すること。

また、各既存施設は、環境や制度上、利用しにくいという現状があるため、こども健康部を中心に、子どもの居場所を検討する際は、利用者の声を聴きながら、見直しをしていくこと。

6 おわりに

本格的な人口減少、少子・超高齢社会に突入している現在、持続可能なまちづくりへの転換を図ることは非常に重要である。その実現のため、優先的に取り組んでいる5つのリーディングプロジェクトは、どれも大切であるが、結婚・妊娠・出産・育児への切れ目ない支援を行い、安心して子育てできる環境を整備することで、本市への移住・定住や地域のにぎわい創造につながるものと考えている。

本市の子育て環境について様々な課題が山積しているため、他市の取組を分析・共有して、子育てに関連する部署だけでなく、全庁的によりよい施策や事業を行っていくことが重要である。

生まれ育った環境に左右されることなく、また、支援の「支え手」「受け手」に分かれるのではなく、一人一人が地域の一員として、共によりよい地域を目指していくことが求められる。

本常任委員会でも、引き続き、課題に対するアンテナを高くし、市民ニーズの適格な把握と市政への伝達を継承していきたい。

今回の提言が、子育て世代が「秦野市で子育てしてよかった」と思えるまちとなり、若い世代も「秦野市に住み続けたい」と思っていたけるようになることを期待するとともに、安心して子育てできる環境を整備することで、地域のにぎわいが活性化するだけでなく、本市が子育てに適しているということを市内、ひいては全国で認知され、移住・定住につながることを期待する。

秦野市議会 文教福祉常任委員会

委員長	福森 真司					
副委員長	間地 薫					
委員	石川 潤	桑原 昌之	中村 知也			
	川口 薫	小菅 基司	横溝 泰世			